

たまいたま 川柳

交風中暑



谷川岳 オキノ耳

2020年
8月号 (No.729)

日川協加盟

巻頭言

店蔵とくろく

願法みつる

日本各地では時代とともに都市の近代化が進んでいる。一方、古き良き情緒を残す遺産的な風景や建造物も多い。古い人間？ほど、若者とは異なる情緒に精神を仮託する。一瞥すればただ古臭い建物にも、日本人の歴史の必然と、遅しい知恵の存在を深く広く味わうことが出来る。

各地の街道沿いで見かける店蔵（みせぐら）もその一つ。武蔵の国（川越）は小江戸と呼ばれた城下町。店舗と住宅を兼ねた黒い店蔵は、良く保存されており観光客にも有名。厚さ三十センチを超える漆喰壁に、菜種油の油煙を練り込んだ黒漆喰を塗り磨き上げたもの。重厚な偉容を見せる。石材主体の西洋建造物に比して木造和式のそれは火災と地震に弱い。喪失と再建を繰り返す歴史だ。その中で、江戸時代の防火技術を参考に、土蔵の城郭や町並みを造り上げた知恵は素晴らしい文化だ。観光の折、視点の置き所如何で文化のミクロ・マクロをも感じることが出来る。

思えば川柳という詩文化の世界も、日本古来の庶民文芸の中では明確な位置付けを保っていた筈である。けれども現代の川柳文化は、マクロ化した価値観の中で古臭い木造建築物を眺める目線の中に在るようだ。本来の価値は古物化されて、利用可能な古材だけがアンティーク風な店舗に老骨を晒している。それでも、古川柳から続く新新川柳を求める気骨のある人材が多々あることも、事実らしい。

日日是好

願法みつる

纏振る屋根を火の粉が舐めた華

柔肌がでんと構えりやなまこ塀

骨董の価値知るころの皺と金

時々は幽霊も出る文化財

算盤の音が江戸には冴えていた